昭和40年4月5日第三種郵便物認可
（旧「公衆衛生」）

2014年11月1日発行
第578号（通算）
発行：奇数月1日
会員購読料：1月10円(年間60円)
一般購読は別途送料

環境づくり・健康づくりのコミュニティ情報紙

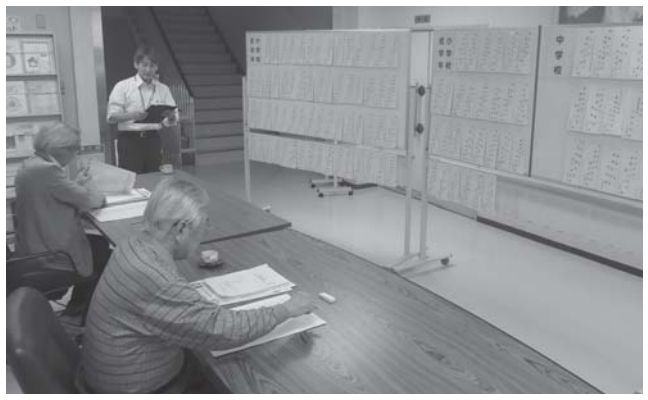
環境と健康

発行者
一般財団法人 ～みんなの生命（いのち）をまもりたい～
広島県環境保健協会
近光 章
広島市中区広瀬北町9番1号
郵便番号 730−8631
電話 082−293−1511番
振替口座01380−2−27511
URL http://www.kanhokyo.or.jp/

平成26年度環境啓発ポスター・標語コンクール

県内の小中学生より32,031点の応募

15市町公衛協が事後フォロー活動を展開



10月6日、「平成26年度環境啓発ポスター・標語コンクール選考委員会」が公衆衛生会館で開催され、今年度の入選作品66点（ポスター34点、標語32点）が選定された（**入選作品は2面参照**）。

環境啓発ポスター・標語コンクールは、地区衛生組織活動の支援を目的とする「地域活動支援基金」を活用した事業で、公衆衛生推進協議会が展開する学社融合の取り組みを促進し、環境への負荷が少ない持続的発展が可能な社会環境づくりに貢献することをねらいとして実施している。

今年度は、22市町公衛協が参加した。昨年に続き「私たちがすむ地球を守ろう」をテーマに募集したところ、小学校22、3校、中学校49校の参加があり、ポスターは1万3261点、標語は1万8770点が各市町公衛協に集まった。今年度は、参加学校数、作品数ともに、昨年度より増加している。これら約3万2000点の作品を、まず各公衛協で選考し、ポスター259点、標語307点が当協会に推薦され、第2次審査の対象となった。

今年度は、11月26日に広島県尾道市の「広島県立びんご運動公園」で開催される第55回広島県公衆衛生大会で受賞作品を表彰し、紹介する。その後は、各地域で作品を広く住民へ広報する事後フォロー活動で活用される。

事後フォロー活動を展開する公衛協は15市町公衛協で、祭りやイベントで作品の展示や表彰式を行ったり、優秀作品をクリアファイルに印刷して配布するなど、地元ならではのさまざまな広報活動が展開される。

部門別受賞点数

ポスター	小学校低学年の部	最優秀賞1点、優秀賞3点、奨励賞7点
	小学校高学年の部	最優秀賞1点、優秀賞3点、奨励賞12点
	中学校の部	最優秀賞1点、優秀賞2点、奨励賞4点
標語	小学校低学年の部	最優秀賞1点、優秀賞2点、奨励賞6点
	小学校高学年の部	最優秀賞1点、優秀賞4点、奨励賞10点
	中学校の部	最優秀賞1点、優秀賞2点、奨励賞5点

受賞作品66点決まる

選考委員会では、公衛協の推薦作品566点から66点の受賞作品を選出した。推薦作品には、子どもたちの純粋な気持ちや思いが表現された感性豊かな作品が多くみられた。受賞作品の選考にあたっては、6人の選考委員がポスターと標語に分かれて審査を行った。選考委員のコメントは次のとおり。

◆森嶋委員長（標語）

毎年、子どもたちの感性豊かな作品には心を動かされる。テーマは昨年と同じであるが、新しいキーワードや表現を用い工夫されており、良い作品が多くみられた。

◆務中委員（標語）

毎年同じような作品が出てくるなかで、今回も子どもならではの作品が多くみられた。一つ一つの作品からは、子どもたちの純粋さや作品に込められた意識や思いがよく伝わってきた。

選考委員会

◆東海委員（標語）

審査する過程でとても驚きました。感性豊かで、言葉に躍動感がある作品が多かったからです。感じたことを表現する力はとても大切です。今後もその力を磨き、同時に環境問題への意識をさらに育んでほしい。

◆内田委員（ポスター）

新たな感覚の作品がいくつかみられ、作品の仕上がりも丁寧できれいなものが多かった。今後も同じような視点での作品となることが考えられるため、少し視野を広げる必要がある。また、今年度は一部に盗作や誤字がみられ、残念であった。

◆吉田委員（ポスター）

魅力的な作品が多く、選考作業は楽しかった。夏休みの期間に、家族と一緒に過ごすなかで作製された作品には、子どもたちの素直な気持ちや思いがよく表現されていた。

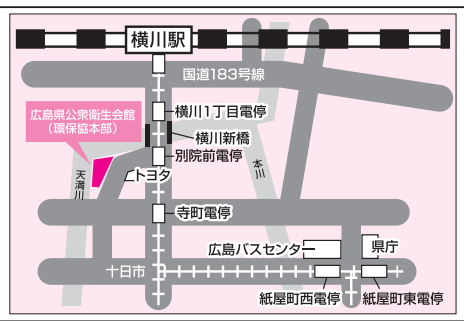
◆菅川委員（ポスター）

昨年と同じような作品であるが、中には新たな視点で描かれた作品もみられた。多種多様な表現やキャッチコピーを用い、子どもらしい視点で書かれた作品が多かった。また、盗作や誤字については今後気をつけてほしい。

琴線歌（きんせんか）

『食べる』を考える

食べることは、生きることの基本から、食文化を継承する等々の次元のものまで、実に多様性に富んだ行為です。このことは、食べることが生きること、命を繋ぐというヒトも含めた生命体としての原点であるからだと思います▼栄養学の歴史から、食の歴史をのぞいてみます。紀元前5世紀に生まれたギリシャの医師ヒポクラテスは、歯ぐきの出血などビタミンC欠乏症とみられる症状（壊血病）を克明に記録しています。壊血病とともに、脚気、くる病、ペラグラ、悪性貧血は、ビタミンの五大欠乏症と呼ばれ、多くの人の命を奪いました。こうした病いから人々を救うために、何をどう食べたらよいのかが栄養学の始まりでした。その後、科学の発展により、栄養学の研究も進展し、新たな栄養素が発見され、最近では、食べ物の機能性なども解明されてきました。それに伴い、新商品の登場、健康維持、増進などを視点に置いた食材の組み合わせや新たなメニューなども続々登場し、先進国では経済の成長を土台に、豊かな食生活へと続いていったのです。しかし、経済的に安定した豊かな食生活は、飽食と隣り合わせとなり、生活習慣病という新たな課題と向き合わなければならなくなりました▼私たちは、食べ物の不足により多くの病いを抱える時代から、欠乏症の無くなった先進国においては、生活習慣病などに取り組むようになると、栄養素を扱う栄養学は、人体の側面から栄養を扱う人間栄養学にシフトし始めました。さらに、グローバルに人も物も行きかう現代においては、人間栄養学は、食料の生産、流通、分配、消費、廃棄、地球温暖化や社会と経済などの問題も含めて考えていく必要性が出てきました。

（NPO法人あいあいねっと 理事長 原田佳子）

一般財団法人 ～みんなの生命（いのち）をまもりたい～
広島県環境保健協会
〒730-8631 広島市中区広瀬北町９番１号（広島県公衆衛生会館）
TEL:082(293)1511 ［大代表］
FAX:082(293)1520
かんほきょう 検索